

鉱業博物館だより

2021年
夏
第19号

国立大学法人 秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館

〒010-8502 秋田市手形字大沢 28 番地の 2 / TEL 018-889-2461 / FAX 018-889-2465
メールアドレス w3admin@mus.akita-u.ac.jp 公式サイト <http://www.mus.akita-u.ac.jp/>



インドネシア・ブル島サヴァナジャヤの風景。かつて、9.30事件のタボルたちが建設した水路で婦人たちが洗濯をしている。

研究ノート	
「ナラティブ研究：ユーモア—インドネシア 1965 年 9.30 事件犠牲者の語り」	国際資源学研究科教授 三宅 良美 ……2
標本紹介	
「クランツ標本・クラーク氏標本 岩石薄片セット」	国際資源学研究科 西川 治 ……6
鉱業博物館活動報告	
デジタルコンテンツを作成中です	……………7
1F の展示ケースに照明を設置しました	
秋田臨海鉄道より寄贈品が贈呈されました	
令和3年度活動報告と予定／メディア出演・取材	……………8
博物館からのお知らせ	
ご利用案内	……………8

研究ノート

ナラティブ研究：ユーモア－インドネシア1965年9.30事件犠牲者の語り

国際資源学研究科教授 三宅 良美

はじめに

地質学のフィールドワークは地層と向かいあい、そこに無言でたたずむものに科学的調査のメスを入れていくのだろう。一方、言語人類学はその地にいる人々の発話に全面的に依存する。話者たちを、言語学者は、(文化人類学のように) インフォーマント ‘情報を提供してくれる人’ とは呼ばず、‘コンサルタント’ と呼ぶ。こちら側は、はい、いいえもわからない無知な子供だ。

資源は自然資源と文化資源のカテゴリーとにわけられる。言語は文化資源の最たるものである。だが、言語は自然資源でもある。言語は、人が生来言語生成力を身につけて生まれてくるものだからだ。言語学はその能力がどうあるかを言語現象を通して研究してきた。だがその背景にある文化のヴァリエーションについては文化人類学にお任せしてきた。

そんななか、言語現象の社会的な部分に関心をもったのがペンシルバニア大学の W. Labov (ラボブ) (1927～) であろう。ニューヨーク市のデパート群にみる発音のヴァリエーション(母音の後に来る子音 /r/ を発音するか、しないか) (Labov 1972)、標準語から逸脱しているニューヨーク・ハーレムの子供たちの語りの論理性などに目を向け (Labov 1969)、言語はダイナミックなものであり、そのコミュニティーや社会と切り離せないものであることを証明した。また、人の語り(ナラティブ)には、語る側がツールとして使う6つの主要な要素—「アブストラクト」から「コーダ」—があることを主張した。私は、とりわけ、このラボブによる、生死にかかわる体験のナラティブ

研究 (Labov 2013) に興味をもった。人は生死をどう語るか。

この研究ノートは、ラボブに鼓舞されたものであるが、一般の「語り」とは異なり、「これまで口を閉ざされていた人の語り」という意味でやや逸脱しているし、野心あるものだといえる。

1945年8月21日に東ジャワ・ブリタルで生まれた男性芸術家レオ・ムルヨノ氏(以降、レオ)は、1965年9.30事件の犠牲者である。15年間の拘留とブル島での強制収容所の生活のあと、戻ってきたジャワでも、家に人が集まることを禁じられて点々と移動して生きていた。あれから50年が経ち、政府が民主化の方向に歩み始め、ようやく語ることができるようになったのである。

また、芸術家であるレオは2017年ごろから記憶に基づいてブル島での労働や風景のスケッチ画を描き始めた。ブル島の開拓村サヴァナジャヤの風景や湾岸の図は正確で、歴史家たちを驚かせているという。

私は、犠牲者の語りにプラグマティクス(語用論)上の特徴が見いだせるだろうか、という問いをもっていた。また、沈黙を強いられた人々が語ることができるようになったとき、何を語るのだろうか。語ることは何を意味するだろうか、知りたかった。(三宅 2018a, 2018b)。

このノートは、2015年より始めた元9.30事件犠牲者のナラティブ収集のプロジェクトのためのコンサルタントのひとりであるレオのナラティブについて報告するものである。

レオは、ジョグジャカルタに住まう Pipiet Ambarmirah (以降ピピート) という名の、犠牲者らの世話をしている女性の父親



レオ 1985年ごろ『砧を打つ女たち』(パティック画)
(Leo Moelyono, Women pounding lesung)

である。私は、数多くの犠牲者らをこのピピートに紹介してもらい、家を訪ね、数時間のインタビューを繰り返した。レオは、ピピートの父親であるために何度もインタビューを繰り返している。インタビューの録音を記録したものの一部を紹介する。

背景

1965年9月30日の夜、首都ジャカルタの6人の将校が自宅から連行され殺害、古井戸で死体が見つかった9.30事件の犯人として、PKI（インドネシア共産党）員とその傘下にある団体のメンバーが次々と逮捕され殺された。当時 PKI は、初代大統領スカルノを支持してきた巨大政党であった。参加団体は労働組合、婦人団体、農協、公務員団体、教職員組合、学生自治会、文化人組織、ボーイスカウト、ガールスカウトなどである。著名な作家ブラムディア・アナンタトゥール、ジャワにおいて重要な文化機能を持つダラン（影絵芝居師）、共産主義という言葉もわからない少年少女、夫が上記の団体に参加していたという主婦たち。殺された人たちは、100万とも200万とも言われるが、生きながらえた人は mantan ‘元’ tapol（Tahanan-Politik：政治犯）——以降、「元タボル」と呼ぶ——と呼ばれている。彼ら自身も「元タボル」と自称する。

インドネシア第2代目大統領スハルトは、このような人たちを凶悪で残酷な悪魔に仕立てあげることに成功した。元タボルは釈放後、近所の手前、家族から接触を断たれほそほと暮らしてきた。月に1度、警察に出頭する義務が1998年まで続いた。

レオは1964年、地元のブリタルの高校を卒業してからジョグジャカルタの ASRI (Akademi Seni Rupa Indonesia) に入学した大学生であった。他の数多くの学生のように CGM (Central Gerakan Mahasiswa) 大学生自治会の中心的メンバーであり、1965年9月末にはジャカルタの東部ハリムで行われた PKI の集いに CGM の代表者として参加していた。

ジョグジャカルタに戻ってから、10月7日、宮廷の北広場に集合するようにいわれ、そのまま逮捕。3つの留置所を5年間にわたり往復させられたあと、中部ジャワと西ジャワの中間に位置する港湾地 Nusa Kambangan に収容された。そして、1970年、ブル島に収容。ジャングルのこの島を、米作の島にかえ、後にジャワ人を移住させるというスハルト政権のプロジェクトに狩り出されたことになる。政府は、1979年末に釈放を発令、3分の1はとどまることを選び (Hersri 2008)、レオはジャワに帰還した。20歳でジョグジャカルタから連行され、戻ってきたときには35歳になっていた。

レオのナラティブ

レオのナラティブの特徴には、1. インドネシア語とジャワ語のコード・スイッチング、2. 直接引用が多い。内容は詳しく、ダイナミックであり、臨場感とジョークに満ちているが、とりわけ顕著なのは突発性である。下記に紹介する。

1. アクシデンタリティー：突然、前触れもなく起こる

レオは、逮捕、留置所送り、ブル島への島流し、そして、その10年後の帰還、それらが前触れもなく突然として起きたことを生々しく描く。

その語りは、時系列というよりは、突如起こる予想のしのない数々の出来事に、緻密に焦点を当てている。それぞれの場面で起きたことをレオは、直接引用を用いて、パフォーマンスの語りのように描いていく。これはレオが画家であり、綿密に画像の構造を作り上げていくその過程に関係があるのではないだろうか。

それぞれの移動は前触れもなく行われていたため、レオに起こることは予想のできないことだった。予想の不可能なこと、想像もしないことが突然起こり、驚き、悲しみ、そして適応、



レオ 2018年『ブル島サヴァナジャヤ開拓村第4ユニット'69』(スケッチ)
(Leo Moelyono, Unit IV, Savanajaya)



自らが建設に加わったダムで旧友たちと語り合う
レオ（中央） プル島 2018年

の過程をレオは臨場感に満ちたジョークで語り続ける。語りには、*tahu-tahu* ‘気がつく’や、驚きの感嘆詞が多い。そのような例を紹介しよう。

Tahu-tahu *satu pagi kita disuruh turun dari kereta.*
come to notice one morning we to be ordered to get off from train.
‘It turned out that one morning we were made to get off the train.’
‘気がつく、ある朝、汽車から降りるように言われたんだ。’

拘束されて3年後、アンバラワ Ambarawa から列車に乗せられたとき、レオはついにジョグジャカルタに帰ることができると思いが躍った。列車がジョグジャに近づくと、わくわくした。しかし、列車はジョグジャカルタでは停車せず、彼らを再び、一年前に収容されたヌサ・カンバガンまで運んだのだ。レオはヌサ・カンバガンに連行され、目の前に広がる海をみたとき、ついに自分の悲劇的な運命に気づいて涙したと語る。

会話シークエンス1

- (1) *Saya kira akhirnya bisa pulang ke rumah*
I thought finally can go back to home
I thought, finally I can go back home.
‘ついに帰れると思ったんだ。’
- (2) **Eeh,** *di Jogja, (kereta) tidak berhenti!!!*
EXP in Jogja not stop
Ah, in Jogja, the train did not stop!!!
‘ええ!! ジョグジャに来たのに、汽車が止まらないんだ!!’
- (3) *Saya kira nanti berhenti di Lempuyangan...*
I think later stop in Lempuyangan
I thought that (the train) will stop in Lempuyangan.
‘じゃあ、次のレンプヤガンで止まるんだろう、と思った。’
- (4) *Di Lempuyangan juga tidak berhentiii (LAUGH).*
in Lempuyangan also not stop (LAUGH).
It did not stop at Lempuyangan, either!!
‘レンプヤガンでも止まらない!’

- (5) *Ciloko, kuwi (Javanese)*
disaster this
It was a disaster!!!
‘大変だ、これは。’

2. 詳細な、ユーモアに満ちた描写

極めて詳細でユーモアに満ちた描写。その多くは、会話の直接引用と、ジャワ語のモノローグを伴う。

1) エピソード1 ウィログナンの留置所の青いズボン

ヌサ・カンバガンを出るまでの留置所には、政治犯タポルらと刑事犯がいた。軍と警察は、刑事犯らにタポルの管理をまかせた。窃盗や傷害、殺人のかどで逮捕されている刑事犯に管理されることは皮肉であり辛いことであったが、レオはそのときのいくつかのエピソードをユーモアを交えて語る。

刑事犯のひとりがレオのはいている青いズボンを欲しがった。そのズボンをくれたらトウモロコシをやるというのだ。刑事犯らは、白飯を十分にもらっていたし、飢えることがなかったが、タポルは一握りのトウモロコシしかもらえずいつも飢えていた。だから、食べ物がもらえると聞いたレオは迷わずズボンをやり、かわりにトウモロコシをもらい、それをタポル仲間と分け合った。

しかし、タポルのひとりが言った。「ズボンなんかやらなくても、トウモロコシはもともとタポルが食べるものなんだから、トウモロコシとの引き換えにズボンをやるっていうのは、「*Korupsi* (汚職、贈収賄) なのだ」と。

会話シークエンス2

- (1) *Celana biru saya, setelah jadi jagung,*
pants blue me, after become corn,
dapat kritik dari teman lain.
got criticism from friend another
‘わたしの青いズボンがとうもろこしに変わったわけだけど、あとで友達に怒られたんだ。’
- (2) *Jangan kita, jangan barter.*
don't we, don't barter
‘だめだよ、交換しちゃ。’
- (3) *Sebab jagung itu sebenarnya jatah kita.*
because corn that actually portion we
‘とうもろこしは最初から俺たちのものだろ。’
- (4) *Nara pidana kan jatahnya nasi.*
convicted criminas, TAG. portion-DEF.ART. rice
‘刑事犯たちは白いご飯をもらってるじゃないか。’

- (5) *Kalau jatah kita yang diberikan kamu, berarti*
 if portion we REL.PRO. Digiven you, mean

kamu memakan jatah kita semua
 you eat portion we all

‘お前が俺たちの貰う分をもらってしまったら、俺たちみんなのものをお前が食ったということなんだよ’

- (6) *korupsi itu!*
 corruption that
 ‘それって、「収賄」だろ。’

2) エピソード2 ウイログナンの看守との面会

ウイログナンでは、ある日、レオは、収容所の看守長に呼ばれた。すでに青いズボンもなく、また、着るものもほとんどなかったレオはその日、学生会など共産党傘下の組織がよく使ったシンボル obor (たいまつ)、が描かれているTシャツしか残っていなかった。看守長に呼ばれたとき、仲間のひとりは、「そんなシャツ着ていくんじゃない、殺されるぞ」とさえ言ったが、他に着るものがなかったのだ。足がぶるぶる震えた。そのときの状況をレオは次のように語る。(原文、逐語訳略)

会話シークエンス3

- (1) (看守長)「名前!」向こうのことばだった。
- (2) (レオ) 「レオ・ムルヨノです。」
- (3) (看守長)「大学生か。どこの大学か。」
- (4) (レオ) 「アスリ(芸術大学)です。」
- (5) (看守長)「だったら絵がかけな。」
- (6) (レオ) 「できますとも。」ジャワ(敬語)で答えた。
- (7) (看守長) 部下に「画材をやれ。」
- (8) インドネシア学生運動中央組織の T シャツは、私を殺すどころか仕事をくれたんだよ!(笑)

こうして、殺されるかと思っていた看守長との面会も、逆に絵描きとして雇われる機会になった。レオは当時の政権下で、愛国のヒーロー、ディポネゴロやカルティニといった歴史的人物を描く肖像画家にさせられた。もっともうれしかったことは、もはや空腹に悩むことがなくなったことである。

おわりに

レオは、タボルたちの過酷な体験、とりわけ死や殺戮に関して、固有の語彙と表現をもっている。このユーモアに満ちた体験談は、常に死と隣り合わせにいた人が培ってきた強さを表している。後の2018年、私は、レオが長年望んでいたブル島再訪をかなえてあげたいと、共にブル島を訪問した。残った友人との再会は思い出話で弾み、ジョークと笑いが止まらなかった。

2015年から2018年まで35名ほどの語りを収集した。当初は沈黙していた女性犠牲者たちの語りを集めていた。その後



レオがデザインしたTシャツ ‘スハルトは言われたーどうだい？ 俺の時代は良かったろ?’

亡くなったり病床についている人も多い。私は、これらの語りの言語上の特徴を探るとともに、「語ることのもつ意味」さらに、「セラピーとしての語り」の問題も探っている。事件から50年以上も過ぎたが、やっと人前で話すことのできるようになったのはつい最近なのだ。彼らの心理の過程を追うことは、今後も必要である。事件の真相は闇に葬り去られ、犠牲者たちはいまだ汚名を着せられているからである。彼らは、国家との *rekonsiliasi* (和解 reconciliation) を求めて語り始めた。

逐語訳用語

DEF. ART: 定冠詞 EXP: 感嘆詞
 REL. PRO: 関係代名詞 TAG: 付加詞

参考文献

- Hersri Setiawan (2008) *Catatan Harian dari Pulau Buru*. ('Diary from Buru Island') Galang Press.
- Labov, William (1969) 'The logic of non-standard English', in J. Alatis (ed.), *Linguistics and the Teaching of Standard English to Speakers of Other Languages and Dialects*. Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics 1969. Washington, DC: Georgetown University Press. pp. 1-44.
- Labov, William (1972) 'The social stratification of (r) in New York City department stores', in William Labov, *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. pp. 43-69.
- Labov, William (2013) *The Language of Life and Death: the Transformation of Experience in Oral Narrative*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miyake, Yoshimi (2018a) 'Linguistic features of Javanese-Indonesian narratives of trauma' SEALS, Kaosiung, Taiwan.
- Miyake, Yoshimi (2018b) 'Talking about Tragic Experiences of September 30, 1965 Incident in Indonesia' 14th Israeli Asian Studies Biennale Meeting Hebrew University of Jerusalem.

標本紹介

クラントツ標本・クラーク氏標本 岩石薄片セット

国際資源学研究科 西川 治

近代化が強力に推進された明治期から大正期にかけて、日本の主要な大学の前身にあたる帝国大学や専門学校が数多く設立された。秋田鉱山専門学校の創立も今から111年前の明治43年(1910年)である。地質鉱山系の学校では、欧米から、進んだ学問体系や人材とともに、多くの機器や標本、模型を輸入している。この頃にドイツのクラントツ商会から購入された標本群は、クラントツ標本と呼ばれている。現存するクラントツ標本は、東京大学総合研究博物館のものがよく知られているが、最近、秋田鉱山専門学校が購入したクラントツ標本が見つかり、鉱業博物館に標本登録された。

クラントツ商会は、ドイツのボンを拠点とする地質調査道具、地学関係の書籍や教育コンテンツ、岩石、鉱物、化石標本や模型などを扱う、現在も世界的に名の知れた商社である。フライベルク鉱山学校で学んだ Dr. Adam August Krantz が1833年に創業した。クラントツ商会のドイツ語の正式名称は、Dr. F. Krantz, Rheinisches Mineralien-Kontor であり、創業者の名前とは異なっている。これは、August Krantz の甥でヴロットワフで鉱物学を学んだ Friedrich Krantz が、1888年に August の義理の息子から会社を買取っているからである。

今回登録されたクラントツ標本は、岩石薄片セットである。黒のクロス張り幅広のケースに250枚のプレパラートが短辺を立てた状態で収納されている。岩石とスライドガラスの接着に

は松脂が使用されているようである。ラベルには、クラントツ商会の名前が印字され、岩石名と産地が筆記体の手書きで書かれている。岩石の種類は、深成岩、火山岩、変成岩、堆積岩とほとんどの種類が網羅されている。産地は、チロル、ハルツ、レーン、オーデンヴァルト、ブラックフォレスト、ボスガス、フライベルクのあるザクセン地方といった、ドイツとその周辺地域の山地や丘陵地帯が大半を占めている。他のヨーロッパの地域から産出した岩石も40枚ほどある。北欧産の深成岩類や高度変成岩類は、始生代や原生代の古い大陸地殻を作る岩石である。また、遠いところでは米国やブラジル産の岩石も一点ずつ含まれている。

クラントツ標本とともに、クラーク氏の125枚の岩石薄片セットも標本登録された。薄片のラベルの岩石名と産地は手書きの筆記体であるが、Ward's Natural Science Establishment Rochester, N.Y. の印字がある。このことから、ニューヨークロチェスターの理科教育アイテム販売を手掛ける現存する業者の製品であることが判る。この会社も1863年創業の老舗標本業者である。薄片は、秋田鉱山専門学校と鉱の文字の焼き印が押されたやや背丈のある木箱2つに入れられており、「クラーク氏米国産岩石薄片」と墨書きされた紙が貼ってある。クラーク氏の薄片セットを保管するために、秋田で特別にしつらえたものであろう。産地は全米におよんでいるが、ニューヨークを中心とした東部地域が多い。

今回、博物館に所蔵されることになったクラントツとクラーク氏の薄片セットは、秋田鉱山専門学校創立年とほぼ同じころに、地質学の研究教育に必要な備品として顕微鏡とともに購入されたものと推定される。二つの薄片セットは、ともに100年以上前の資料であるが、岩石の種類が多様で仕上がりが良く、現在でも記載岩石学の教材として十分に通用する。保存状態の良さからみて、初期の段階では岩石薄片の見本とされたかもしれないが、まもなく、自前の薄片が作られ始めると同時に役割を終え、戸棚の奥に大切にしまわれたのであろうと推測される。

しかしながら、これらの薄片セットは、鉱山専門学校設立当時のことを伝える大変重要な史料である。また、薄片の産地の地域性や広がり調べていくと、産業や交通の発達とともに、発展初期の地質学が、ヨーロッパや北米の科学技術の先進地域から世界の未開拓地域に急速に広がりはじめた時代背景をうかがい知ることができて興味深い。



(左) クラントツ標本の岩石のプレパラート



(右) クラントツ標本の収納ケース



クラーク氏標本

鉱業博物館活動報告

デジタルコンテンツを作成中です

地球や資源に関する展示内容を理解してもらい、標本の魅力を伝えていくことは、鉱業博物館の重要な使命です。鉱業博物館の展示棟には、3000点を超える標本が、16のコーナーに分かれて展示されています。各コーナーでは、パネルや補助ラベルが設置され、解説が施されています。しかしながら、限られた数のパネルやラベルでは、標本がもつ様々な情報を十分伝えきれません。また、文字による解説だけでは単調になりがちで、解説の方法には“飽きさせない”工夫も必要です。

このような課題への取り組みとして、鉱業博物館では、展示物や展示コーナーの内容を、画像や動画を見せながら音声で解説するデジタルコンテンツを作成しています。コンテンツ作りでは、多くの文献や資料を集め時間をかけて内容を検討する必要があります。そのため、地学や資源分野を専門とする本学教員や理科の教員をされていたサイエンスボランティアの方にも協力を依頼しています。利用のしかたとして想定しているのは、①来館者が個別にタブレットを持ち歩いて、標本の前で自由に解説を聞く、②館側が来館者をガイドするときに活用する、③休憩スペースや講堂で、ライブラリーの中からコンテンツを選んで視聴する等の方法です。鉱業博物館では、まず、①の方法を実現するために、館内のネットワーク環境の整備も同時に進めています。

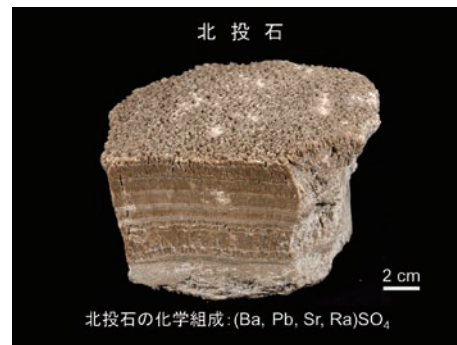
鉱業博物館では、外国人の研究者や留学生の利用も多く、以前から英語での解説を求める声がありました。他の大学博物館や国立博物館などでは英語対応がかなり進められており、当館でも外国人向けの解説を急ぐ必要があります。また、大人だけでなく、子供たちを含む幅広い年齢層に鉱業博物館へ来館し

ていただき、楽しんだり、学習できる環境を整えることも重要です。そこで、本編のほかに、英語版と小学生版も併せて作成する計画です。

6月末現在、10種類30本のコンテンツがあります。環境整備が整い次第、学生やボランティア、一般の来館者のご協力をいただいて試験公開を始める予定です。そこで寄せられた意見や感想をもとに、本格公開に向けて内容や運用方法の改善を図っていきます。



(右) デジタルコンテンツ『アンモナイトと「生きた化石」オウムガイ』の画像



(左) デジタルコンテンツ『北投石』の画像

1Fの展示ケースに照明を設置しました

展示ケース3台にLED照明を設置しました。作業にあたっては、サイエンスボランティアの小野勝美さんに多大なるご協力をいただきました。2台の展示ケースには、職場体験学習の作品を展示しています。1つは秋田市立桜中学校の“桜色の鉱物を集めたもの”、もう1つは秋田大学教育文化学部附属中学校の“奇跡の奇石”です。LEDに照らされ幻想的に光輝く石たちの姿を、ぜひ見に来てください。



LEDでライティングされた展示ケース

秋田臨海鉄道より寄贈品が贈呈されました

秋田臨海鉄道株式会社より、25点の資料が当館に寄贈され、6月25日（金）、博物館で贈呈式が行われました。寄贈された品々は今後、博物館に展示される予定です。



贈呈式の様子。秋田臨海鉄道の志水仁社長（左）と石山館長

鉱業博物館活動報告 / 博物館からのお知らせ

令和3年度活動報告と予定

無料開放デー

4月17日(土)、18日(日)	科学技術週間
5月10日(月)	地質の日
5月18日(火)	国際博物館の日
11月3日(水)	教育・文化週間(文化の日)

市民向け講演会

後期に3回、オンライン開催を予定

特別展『銀と金からみるアラビア衣装』

昨年、開催を予定していた特別展を、今年度末から再来年度にかけて、会場での展示に加えてオンライン展示を同時に開催する計画で、準備を進めています。詳細が決まりましたら、当館 Web サイトに掲載しますので、ご確認ください。



(上) 未婚女性が外出時に頭から被っていた衣服スマーダ 撮影：片倉もところ、1971-74年、ダフ・サイニー村、M_5578、© 国立民族学博物館 出典：縄田編 2019: 4-5



(右) 鼻の部分にコインを並べた女性用飾面ブルグア (サウジアラビア)

メディア出演・取材

秋田テレビ (AKT)

ふるさと秋田再発見シリーズ秋田人物伝2021年度 Vol.1 『松田解子』に、今井忠男教授(前鉱業博物館長)が出演し、松田解子さんの出身地である荒川鉱山の歴史などを解説しました。また、当館の黄銅鉱標本も、番組の中で紹介されました。
*令和3年5月30日(日) 13時30分~14時25分放送

秋田ケーブルテレビ (CNA)



収録風景

「し〜なスクール課外授業」に館長 石山大三教授が出演し、小学生に向け、鉱業や鉱物の大切さなどについて特別授業を行いました。この番組は、当館 Web サイトから見る事ができます。

*令和3年6月19日(土) 9時~9時30分放送、15時~15時30分再放送

秋田朝日放送 (AAB)

「サタナビっ!」のコーナー「とくナビっ! 秋田れきし発見〜石の声に耳を傾けて〜」に、館長 石山大三教授が出演し、鉱業博物館の鉱石などをクイズ形式で紹介しました。



収録風景

*令和3年6月19日(土) 9時30分~11時放送

秋田魁新報社発行フリーペーパー『mari*mari』(マリ・マリ)

7月2日発行号の特集「石と岩のこと」で、鉱業博物館が紹介されました。

◆ご利用案内◆

入館料	【大人】100円 【高校生以下】無料
開館時間	9時から16時
休館日	年末年始(12月26日~翌年1月5日)及び12月~2月の日曜日、祝日
アクセス	<p><バスでお越しの方> 秋田駅西口12番のりばから中央交通バス鉱業博物館入口下車徒歩5分</p> <p><徒歩でお越しの方> 秋田駅東口から約30分</p>
Web サイト	http://www.mus.akita-u.ac.jp/
その他	入館される場合は、事前に予約をお願いいたします。また現在、新型コロナウイルス感染症予防のため、館内の案内は行っておりません。

※開館情報は、当館 Web サイトでご確認ください。



ぜひ、実物を見に来てください!



表紙のタイトルに使用したラブラドライト。角度によってオーロラのように輝く美しい鉱物です。